

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ふたたび人名Г ю р Г и について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 神戸市外国語大学研究会 公開日: 2018-04-20 キーワード: 作成者: 岡本, 崇男, OKAMOTO, Takao メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2395

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ふたたび人名 Гюрги について

岡本 崇男

1. はじめに

本論文の目的は、わたしがかつて中世ロシア語の正書法における人名 Гюрги の表記が持つ意味について論じた岡本(2008)において意図的に回避した問題、具体的に言うところの表記の音価について考えることにある。なぜわたしが人名 Гюрги の表記の音価に関する議論を回避したのかというと、この人名は他の人名に比べて表記のバリエーションが多様性に富んでいたため、綴りが違えば音価も違うと考えるよりも、同一の音価だが何らかの要因が影響して表記の揺れの幅が大きくなったと仮定した方が中世ロシア年代記の正書法と正音法の関係を正確に捉えることが出るのでないかと期待されたからである。

このように仮定することの根拠となったのは、中世ロシア語において「雨」を意味する単語に見られる二つの表記のバリエーション ДЪЖГЬ, ДЪЖЧЬ について言語学者ロマン・ヤコブソンが議論を展開した際にとった立場である。それは、北ルーシに特有の ЖГЬ と南ルーシに特有の ЖЧЬ は「違った音結合を表しているのではなく、むしろ同じ音結合を表していたのだが、南北の子音体系が違っていたために、この音結合に対する評価が違ってしまった」(Jakobson (1971, 253)) というもので、ГЬ と ЧЬ が違った音価を表しているのではなく、ある特定の音結合を表す際に、それぞれの地域の音韻体系の事情の違いから、違った文字が当てられたに過ぎないという立場である。つまり、この ДЪЖГЬ, ДЪЖЧЬ は古教会スラヴ語 ДЪЖДЬ に起源を持つ単語なのだが、古教会スラヴ語の文字結合 ЖД は Ж+Д (ž+d) ではない特殊な子音結合を表しており、その子音結合が東スラヴ語には存在しないために、中世ロシア語テキストにおいては地域による表記の相違が生まれてしまったのである。

人名 Гюрги もやはり外来の固有名詞が転訛したものであり、複数の表記バリエーションが生成されたことにおいて ДЪЖДЬ → ДЪЖГЬ, ДЪЖЧЬ の場合と同じような現実の発音と表記との関連付けにまつわる問題があったことが想定される。そこで、わたしはこの問題について岡本(2008)において論じたのであ

るが、人名 **Гюрги** が規範形となった時期が長いことから、やはりこの人名の音価の問題も検討すべきであると考えて、ふたたび **Гюрги** について筆を執ることになった。

2. 中世ロシア文章語正書法における **Гюрги** の位置付け

2.1. 岡本(2008)の概要と問題点

表記 **Гюрги** の音価について検討する前に、この表記の音韻的な特徴を確認するために、先ず岡本(2008)の議論の概要を紹介しておく。

中世ロシア年代記において **Гюрги** と表記される人名は、ギリシャ起源の洗礼名 **Георгии** (ギリシャ語 Γεώργιος) の東スラヴ語形であり、現代語の **Юрий** につながる形式である。この **Гюрги** という表記は、ある時期まで年代記において高頻度で出現する規範的な形式であった。ところが、中世ロシアの書き言葉の正書法規範の立場から見ると、この表記には例外的な文字結合が二つも含まれていた。かつて文字 **Г** は、前母音を表す母音字と結合することが原則として許されなかったため、**Ю** [ju] および **И** [i] という前母音を表す文字との結合 **ГЮ** と **ГИ** は正書法の原則に違反しているため、**Гюрги** という表記も本来であれば許容されなかったはずである。それにもかかわらず、なぜ反則表記の人名が年代記に頻繁に登場して、あたかも規範形式のように扱われていたのかという疑問が動機となって、正書法における反則表記の意味を考えることになった。

先ず、検討の対象となったのは、東スラヴ語形の豊富なバリエーションを提供する『イパーチー年代記』(15世紀中頃)であった。この文献には正式な形式 **Георгии** 以外に **Гюрги**, **Дюрги**, **Юрьи** という三つの主要な東スラヴ語形だけでなく、**Дюрди**, **Юрги**, **Гюрди**, **Гюрь** というような文字の組み合わせを変えた結合も見られる。そして、これらの表記の分布状況から、以下のことを推定するにいたった。

- (1) **Георгии** と **Юрьи** は記事の年代に関係なく出現する
- (2) **Гюрги** と **Дюрги** は、一定の期間にわたって出現しており、これらの使用が廃れると **Юрьи** の出現頻度が高くなる。

これらの形式間の関係は、『ラヴレンチー年代記』(1377年)と『イパーチー年代記』における形式の分布を比較することによって更に明確になる。両年代記の前半部の分布状況はほぼ同一なのだが、後半部には次のような違いが見られた。すなわち、『ラヴレンチー年代記』の後半部(いわゆる『スーズダリ年代記』)には文字 **Д** を含むタイプのバリエーション(**Дюрги**, **Дюрди**, **Юрди** 等)が

現れず、その代わり Гюрги および Юрги の相対的な出現頻度が高くなる。また、『スーズダリ年代記』では全時代を通じて Гюрги が使用されているのだが、途中から Юрги と Юрьи の出現頻度が高くなる。そして、その時期（つまり記事の年）が『イパーチ年代記』で Гюрги が使われなくなる時期とほぼ一致している。従って、Дюрги (Дюрди, Юрди) は地域的なバリエーションであり、表記の規範はある時期に Гюрги から Юрги, Юрьи に移行したと考えられそうである。

正書法の規範が変化したらしいということは、『ノヴゴロド第一年代記』の『古輯』(13-14世紀)と『新輯』(15世紀前半から中頃)における人名 Георгии と Гюрги を始めとする東スラヴ語のバリエーションの分布状況を比較することによって裏付けることができる。すなわち、『古輯』においては、Георгии のみが普遍的な分布を示しているが、Гюрги と Юрьи は同一年代の記事に共存することがない。そして、13世紀の二人の書き手たちは専ら Гюрги タイプの東スラヴ語形を使用し、14世紀の書き手は Юрьи しか使用していない。また、折衷的な Юрги の使用例が一つもない。一方、『新輯』では、Георгии と Юрьи が普遍的に分布しており、Гюрги と Юрги が特定の年代の記事に使用が集中している。そして、『イパーチ年代記』においてその特定の年代の記事を調べてみると、Гюрги と Дюрги という表記が頻出することがわかった(Юрий Долгорукий に関する記事)。

以上のことから、正式形 Георгии は時代の変化に左右されない普遍的な形式であり続けたのだが、東スラヴ語形は13世紀から14世紀にかけて規範形式が Гюрги から Юрьи へ移行したと推定することができる。そして、14世紀後半に成立した年代記においては Юрьи がすでに普遍性を持っており、Гюрги は古形として扱われていると考えて差し支えないという結論に達した。

ところで、「Г+前母音字」という正書法違反の文字結合が長期にわたって、あたかも規範形であるかのように使われ続けた理由は何かということ、おそらく正式形 Георгии との起源的な関連性を想起させる効果がこの反則結合にあったのだと考えざるを得ない。そして、『スーズダリ年代記』でなぜか Гюрги が多用され、Юрги が Юрьи よりも頻繁に現れているのも、反則であるけれども正統性のある「Г+前母音字」結合を多用することで年代記に風格を与えようとした編纂者(修道士ラヴレンチー)の意図があったからだと考えられる。以上が岡本(2008)の概要である。

中世ロシア年代記の言語においては表記と発音が一致していたと仮定すれば、Георгии の東スラヴ語形は、地域によって、また時代によって発音が変化したと考えてもよいのだろうが、現代ロシア語がそうであるように、表記と発

音は一对一の対応をするわけではなかっただろう。もちろん、現代ロシア語の正書法と正音法の間には、一定の規則的対応関係が存在しているので、非ロシア語話者だけでなく、ロシア語を母語とする人々も主として学校教育において表記と発音の関係を学習する。しかし、現代語のように言語規範を成文化する習慣、すなわち文法書や辞書を編纂して表記や発音の規範を定着させる習慣がなかった中世ロシアにおいては、表記と発音との対応関係には一定の範囲の揺れが許容されていたようである。例えば、*тъгда, тогда, тъгда* はいずれも同じ語彙であり、おそらく発音も同じである。また、*Черниговъ / Чьрниговъ* という東スラヴ世界に共通の形式以外に *Церниговъ / Цьрниговъ* というような北ルーシにだけ許される局地的な表記も存在している（上述の例は全て『ノヴゴロド第一年代記・古輯』より）。したがって、ある時代に *Гюрги* という一般的な表記と並んで *Дюрги, Дюрди* というような特定の地域に固有の表記があるからといって、後者の地域でこの人名が違った風に発音されていたということではなく、また *Гюрги, Юрги, Юрьи* という表記の時間的な変遷が時代とともに徐々に発音が変化したことを意味しているのでもないとも考えることもできる。

2.2. 先行研究

岡本(2008)の文献目録には人名 *Гюрги* の表記をテーマにした先行研究が一つも挙げられていない。これはひとえにわたしの怠慢によるものなのだが、中世ロシア語の正書法や正音法を扱った研究があまり多くないために、わたし自身が当初から先行研究があることなど期待していなかったからである。しかし、岡本(2008)を公表してからあまり時間が経たないうちに、*Гюрги, Дюрди, Юрьи* などと表記される人名の発音に言及した研究が、すでに1930年代に少なくとも2つあることがわかった。そのうちの一つは、ロシア生まれの言語学者 Boris Ottokar Unbegaun (1898–1973) が1938年に公表した “Le nom de *Georges* en russe” と題された論文 (Unbegaun (1938)) であり、もう一つは同論文に引用されているソ連の言語学者 Борис Михайлович Ляпунов (1862–1943) の論文 “О некоторых примерах образования имен нарицательного значения из первоначальных имен собственных личных в славянских языках” (Ляпунов (1935)) である。ただし、これら二つの先行研究は、目指す方向が違っている。Unbegaun (1938) では、ビザンツ由来の人名が文語と話し言葉を經由してルーシに取り入れられると、通常は二種類のバリエーションを持つのだが (“*Ioann et Ivan, Iosif et Osip, Dionisij et Denis, Jevstafij et Ostap, Jevdokija et Avdot’ja, Ksenija et Aksin’ja, et anisi de suite*” — Unbegaun (1938, 323))、*Γεώργιος* という人名には *Георгий, Егор, Юрий* というように三種類のバリエーションがあるという特殊

性の原因を解明することを研究の目的としている。一方、Ляпунов (1935) は、非スラヴ語起源の固有名詞がスラヴ語において普通名詞化されるメカニズムを探るための試論を提示することを目指していた。そして、文化的に上位の言語から借用された単語が翻訳されることなくそのまま受け入れられた場合に、受け入れられる側の言語の音声を受け入れる側の言語の音声に順応することがしばしば起こる例の一つとして Егорий, Егор と Гюрги, Юрьи が紹介されているのである (Ляпунов (1935, 247–248))。

ここで注目しなければならないのは、Unbegaun も Ляпунов も Γεώργιος に起源を持つルーシの人名のバリエーションを三つのグループに分けていることである。すなわち、一つはギリシャ語形に外見上類似した教会スラヴ語形 Георгии であり、もう一つは Гюрги, Дюрги, Юрьи などの東スラヴ語形、そしてもう一つの東スラヴ語形 Егорий, Егор である。岡本 (2008) では最初の二つのグループしか扱われておらず、三番目のグループに属する名前については一言も触れていない。その理由は簡単で、わたしが調査対象とした年代記テキストに Егорий, Егор などという名前が一度も登場しなかったからである。Ляпунов は Егорий ならびに Егор¹ が「全般的な文化的影響の元で、読み書きを通じて純粋に文献を経由して」(“чисто книжным путем через грамотность в связи с общим культурным влиянием” — Ляпунов (1935, 247)) 中世ロシア語に受け入れられたと主張しているのだが、実はこれらの東スラヴ語形は代表的なロシア年代記にほとんど現れない。文献経由で渡来した洗礼名が実際には文献にほとんど登場しないのである。これに対して、「生きた (=直接的な) 関係によってスラヴ人たちがギリシャ人たちから取り入れた固有名詞」(“К числу собственных имен, перенятых словянами у греков путем живых сношений”) として Ляпунов が例示した Гюрги, Юрги, Юрьи などはロシア年代記に頻出する形式である。おそらくこの矛盾を説明するために Boris Unbegaun は、Γεώργιος 起源の東スラヴ語名をテーマにした論文を執筆するしようと思いついたのではないかと思われる。

以下に Unbegaun (1938) の議論に沿って Георгии – Гюрги / Дюрги / Юрьи – Егорий / Егорей / Егор を巡る歴史的経緯を検証する。

先ず、それぞれのグループの名前がビザンツからルーシへ伝播した経路には二種類あった。一つは文献であり、もう一つは口伝である。そして、文献に

¹ Егор は現代ロシア語の表記である。他の例、すなわち Георгии, Гюрги, Дюрги, Юрьи, Егорий は中世ロシア年代記テキスト上で仕様が確認できる形式なのであるが (ただし、Егорий は岡本 (2008) で分析の対象とした年代記には現れない)、Егор は Unbegaun (1938, 326) によれば 17 世紀末になって Егорей の縮約形として生み出された純粋な口語形であるらしいので “Егоръ” と似非中世ロシア語風には表記せず、現代語の表記で通すことにする。

よって伝えられたのが *Георгии* であり、これは教会で使用された。これに対して *Гюрги*, *Дюрги*, *Дюрди*, *Юрги*, *Юрьи* などはギリシャ語の話し言葉經由で伝わった。そして、*Гюрги* や *Дюрги* のように表記に *Г*, *Д* が使われるタイプは比較的早い時期に消滅し、13 世紀初頭から *Юрьи* が主流の形式となった (Unbegaun (1938, 323))。東スラヴ語形が *Юрьи* に統一される時期については、Unbegaun の主張と岡本 (2008) の推定 (13 世紀後半) との間に約半世紀の差があるのだが、その原因は両者が利用した年代記資料の違いにあると思われる。Unbegaun が根拠としているのは 1879 年に出版された『ノヴゴロド第二年代記』なのだが、この年代記は 16 世紀に成立したもので、写本も 17 世紀と 18 世紀のものしか現存していない。そして、16 世紀以前の記事は『ノヴゴロド第一年代記・新輯』を下敷きにしている²。15 世紀以降に成立した年代記写本では、早い時期の記事にも *Юрьи* が見られる傾向にあり、『ノヴゴロド第一年代記・新輯』もその例外ではないことが岡本 (2008, 84–88) で証明されているので、この半世紀ほどの誤差が生じて仕方がない。いずれにしても、ビザンツからルーシにもたらされた洗礼名は *Георгии* と *Гюрги* / *Юрьи* のタイプの二種類であった。

それぞれのタイプは適用分野が違っていた。*Георгии* は正教会の公式の形式であり、聖者と聖職者のみにこの形式が適用され、一方、俗人は *Юрьи* を名乗った。*Юрьи* は「土着性」が極めて高かったようで、外国人 (例えば、George, Georges, Georg, Giorgio など) には、それが俗人であっても *Георгии* が使われた。*Юрьи* は世俗形であり、俗人に対してはその人の社会的な地位に関係なくこの名前が適用された。したがって、この表記は法律や行政の分野における正式な形式であり、父称 (*Юрьевичь*) や形容詞や都市名 (*Юрьевъ*) が作られ、指小形 (*Гюрята*, *Юрята*, *Юшко*...) も自由に作られた。これに対して *Георгии* から派生した父称、都市名、指小形は 18 世紀になるまで現れない (Unbegaun (1938, 324))。

ただし、世俗形は *Юрьи* ではなく、*Георгии* がルーシの民衆の発音に適応しと *Егорей* と発音されるようになった。『ノヴゴロド年代記』(第二年代記) に出現する *Гегорей*, *Гегории*, *Егорей* がその例である (Unbegaun (1938, 325))。中世ロシア語に [ge], [gi] という音結合がなかったために *Георгии* が *Егорей* となったということは、ГЕ が [je] で実現されたということになる。そして、同じように ГИ が [ji] となったのであれば、*Георгии* は [jeorjij] となるはずなのだが、現実には [jegorej] となっている。つまり、かなり早い時期に /org/ → /gor/ と

² 『ノヴゴロド第二年代記』の書誌情報についてはロシア科学アカデミーロシア文学研究所の URL (<http://www.pushkinskijdom.ru/Default.aspx?tabid=2929>) を参考にした。

いう音位転換が生じたと考えられる。しかし、これについて Unbegaun は何も説明していない。

いつから Егорей が使われるようになったにせよ、教会スラヴ語形 Георгии と Гюрги / Юрьи および Егорей という二つのタイプの東スラヴ語形は 17 世紀末まで共存関係にあったようである (Unbegaun (1938, 326))。つまり、ピョートル大帝の時代になるまで、これらの形式は適用領域を住み分けていたようである。しかし、ロシアの西欧化に伴って Егорей から Егор が作られ、この形式が農民を中心とした大衆に受け入れられると、文献言語上で世俗形として古くから使われていた Юрьи が高貴な名前だと認識されるようになった。そして、十月革命によって教会から住民登録の権利が剥奪された結果、Георгий – Юрий – Егор の共存関係が解体され、それぞれが別の名前と認識されるようになった (Unbegaun (1938, 326–329))。

2.3. 先行研究における Гюрги の子音の音価にかんする見解

Ляпунов (1935)では、単語が借用される場合に、一方の言語の音声他方が別の言語の音声に順化することがあると述べられているのだが (“...происходит известное приспособление звуков одного языка к звукам другого”), ギリシャ語の Γεόργιος が東スラヴ語に受け入れられる際に、どのように適応したのかということについては何も語られていない。また、「順化」(приспособление) というのが、外来語の音声を受け入れ側の言語の音声で置き換えること (例えば、ロシア語の単語が日本語に受け入れられる際に [l], [r] が [r] または [ɹ] に、[b], [v] が [b] に、[x], [f] が [h] になること) をいうのか、それともできるだけ元の音声を維持しようとしながら、なんらかの妥協点を模索すること (例えば、英語のアルファベットの D の名称を [de:] ではなく [di:] に近い音で発音し、「ディー」という表記を考案すること) をいうのかが明確でない。ただし、Гюрги がやがて Юрьи に統一され、Георгии から作られた Егорей からやがて Егор が生まれたと書かれていることから判断すると (Ляпунов (1935, 248)), Ляпунов は「Г+前母音字」で表されていた外来音がロシア語 (東スラヴ語) の [j] に順化したことを暗に認めていることになる。

Unbegaun は東スラヴ語形 Гюрги, Дюрги, Дюрди, Юрьи に含まれる「g', d' (何子音の g と d) および j」の音価について「明らかに前口蓋母音の直前で発音されるビザンツの γ であり、古代ロシア語にはない音声であった」という見解を示している (Unbegaun (1938, 323))。これは、キエフ・ルーシ時代の東スラヴ語の音声体系に属していない子音に文字を充てる必要が生じた時に、統一した対処法が確立されていなかったため、地域によって違った方法で対処したとい

う含みを持たせる発音である。岡本 (2008)で示したように、極めて地域性の高い『ノヴゴロド第一年代記・古輯』では東スラヴ語形の表記が Гюрги から Юрьи に取って代わられる時期を容易に読み取ることができたのであるが、広い地域の出来事が記述の対象になっている『イパーチ一年代記』には、多様な表記が観察される。この場合、おそらく発音は同じなのだが、表記に関しては原資料が書かれた地域の書記伝統をそのまま受け入れるのが習慣になっていた可能性がある（規範的な書き言葉である教会スラヴ語の発音規範は、かなり早い時期に成立したのだが、正書法規範が安定するのにはもっと長い時間を要したらしいということについては Успенский (1994, 34–36)を参照)。

しかし、Unbegaun は「前口蓋母音」(“voyelle prépalatale”)の前の γ 、おそらく後口蓋摩擦音がどのような音声であったのかということには触れていない (Unbegaun (1938, 323))。音価に関する議論は Unbegaun (1938) の本題から外れてしまうので仕方がないことなのだが、一般的にギリシャ文字の γ はヘレニズム時代 (『七十人約聖書』が作られた時代—紀元前 3–2 世紀) から現代ギリシャ語と同じような半母音的な後口蓋摩擦音であったと考えられている。ただし、前母音の前にある時には「強い y 」つまり硬口蓋摩擦音に、やはりコイナーの時代からなっており、現在までその発音が受け継がれているという (Geldart (1870, 30–31), Browing (1983, 26))。したがって、Гюрги, Дюрги, Дюрди, Юрьи に含まれる「古代ロシア語にない音声」というのは後口蓋摩擦音 [ɣ] ではなく、ギリシャ語の $\gamma\epsilon, \gamma\iota$ に見られる硬口蓋摩擦音 [j] のような音声であった可能性が高い。

既に述べたように、中世ロシア語 (=東スラヴ語、Unbegaun のいう「古代ロシア語」) の正書法規範では、文字 Г と前母音字 (Е, И, Ю など) が結合することが許されなかった。中世ロシア語の音体系においては、前母音は硬口蓋子音と結びつき、後母音は後口蓋子音と結びつく、つまり聴音点の近い子音と母音が結びつくという原則が効力を持っていた。共通スラヴ語時代の「音節共調和の原則」(synharmonisme syllabique) が少なくとも表記の上ではまだ生きていたのである。全てのスラヴ諸語に受け継がれた音節共調和の例の一つが「後口蓋子音の第一次口蓋化」で、 k, g, x が前母音と結びつくと、それぞれ $\check{c}, \check{z}, \check{s}$ に変化する (ロシア語の例: плакать – плачет, берегу – бережѣшь, пахать – пашешь)。これら三種類の子音交代のうち $k \rightarrow \check{c}$ と $x \rightarrow \check{s}$ には弁別特徴が一つ変化するだけで、残りの特徴は保持されるという共通点がある。つまり、前者は子音の閉鎖と無声が保たれており、後者は摩擦と無声が保たれている。ところが $g \rightarrow \check{z}$ は有声が保たれているのだが、閉鎖が失われると同時に口蓋化が生じている。 g は k の有声の対となる子音なので、 k が \check{c} に交代するのであれば、 k の有声の

対である g は ģ の有声の対である破擦音 dʒ にならねばならない。ところが、Jakobson (1971, 251)で議論されたようにこの子音 (Jakobson の表記で ʒ) は東スラヴ語に存在していなかった。そこで、ДЪЖДЪ「雨」の北部ルーシ形 ДЪЖГЪ においては、問題の子音が ГЪ と表記されていた。ギリシャ文字 γε, γι で表されていたビザンツの子音は強い有声硬口蓋摩擦音 [j] であった可能性が高いのだが、それが東スラヴ語の有声硬口蓋摩擦音 ž (Ж) とはかなり違った音声だった (遙かに摩擦が強かった?) ために、ДЪЖГЪ の場合と同じように Г を宛てたに違いない。『イパーチ一年代記』で提供されている、普及の範囲が特定の地域に限定された表記 Дюрги, Дюрди, Гюрди で Г と Д がバリエーションとなっていることも東スラヴの人々にはこの人名に含まれる子音が有声破擦音に近い音価を持っていたと認識されていた可能性を示唆している。また、ここで問題となっている東スラヴ語形に対応する現代セルビア語形 Ћорђе (Đorđe), Ћурђе (Đurđe) など、ビザンツの [j] が破擦音と認識される可能性を裏付けるものであると思われる。

3. 音価の変化

東スラヴ語形 Гюрги, Дюрги, Дюрди, Юрьи が最終的に Юрий になったという事実から、ビザンツの [j] に充てられた有声硬口蓋破擦音 [dʒ] が最終的に有声硬口蓋接近音 [j] に順化させられたということになる。すでに述べたように Unbegaun (1938, 321) では、東スラヴ語形 Гюрги, Дюрги, Дюрди, Юрьи に含まれる「g', d' (軟子音の g と d) および j」の音価が「明らかに前口蓋母音の直前で発音されるビザンツの γ であり、古代ロシア語にはない音声であった」と主張されている。つまり、ГЮ, ДЮ, Ю および ГИ, ДИ, БИ に含まれる子音の音価が同じだということである。しかし、少なくとも破擦音に特有の閉鎖の存在を示唆する Г, Д が使われたタイプの形式と交代するように Юрьи が一般化したということ を考慮すると、東スラヴ語形を構成する子音は表記と関係なく同一であったという岡本 (2008) と Unbegaun (1938) の前提には修正を加えた方が良さそうである。つまり、子音の音価には、ある時期に変化が生じたということである。

それでは、音価の変化がいつ頃生じたのだろうか。

すでに岡本 (2008, 86-87)でわたしが指摘したように、『ノヴゴロド第一年代記・新輯』においては、2名の13世紀の写字生の手になる部分、すなわち第1葉表から第121葉表まで Гюрг- が独占的に使用され、14世紀の写字生によって引き継がれた第121葉裏から突然 Юр(ь)- が現れると同時に、Гюрг- のタイプの表記が見られなくなることがわかっている (例外は第127葉表の Гюрята

のみ)。したがって、13世紀末から14世紀初頭にかけて外来語の発音として特別扱いされていた有声硬口蓋破擦音が閉鎖を失って摩擦音化してしまい、既存の /j/ の実現音と同じように発音されるようになったか、あるいは少なくとも /j/ の異音の一つとして認識されるようになったと推定される。14世紀以降の書き手にとって、Гюрг- は時代遅れの表記であり、Дюрг- / Дюрд- は古い上に局地性が高い表記であるが、いずれも Юрь- と同じ人名であると認識されていたために、『ノヴゴロド第一年代記・新輯』が示すように、『古輯』で Гюрг- が使われている部分であっても Юрь- に置き換えられてしまったと考えてよからう。

13世紀後半から14世紀初頭にかけて「Г+前母音字」という表記が徐々に音結合「/j/ + /前母音/」を表すようになったことは、現在もノヴゴロドで発掘作業が続けられている『白樺文書』における表記の分布状況によっても裏付けることができる。Зализняк (2004)によれば、Гюрг- のタイプの表記 (гюрги, гюргевицоу, гюргѣ, гюргю, гюрата など) が見られるのは11世紀から12世紀後半までの層から発見された文書であり (729)、文字 Д が使われた唯一の例 дурьдѣв[и/ѣи?] も12世紀の30年代から50年代の層から見つかっているのに対し (735)、Юрь- のタイプの表記 (юриа, юрел, юрью, юрию, юрьемь, июрьи, июрьевь, июра など) はすべて14世紀の層からの出土文書でしか確認されていない (820)。13世紀の層からの文書には、どういうわけか出現例が少ないのだが、12世紀末から13世紀初頭の層から見つかった文書には гьоргии, георегиа, гергьи, гергла という例がある。最初の2例は Зализняк (2004)の語彙目録では Герьгии の例として分類され、後の2例は Герьгии および Герьги の例として分類されている (724)。『白樺文書』では文字 Е と Ъ が混同される傾向があるので、確かに гьоргии, георегиа はそれぞれ георгии, георьгиа と書かれるはずだったのかもしれない。一方、Герьгии は一見すると Гюрги の変種のように思えるかもしれないのだが、おそらくこれも Георгии の変種の一つであろう。なぜならば、Георгии のビザンツ起源の人名に含まれる母音連続 EO が東スラヴ語では二つの母音のうちの一つが欠落してしまう傾向があるので (Θεοφανής → Фофан, Θεόκτιστος → Фектист, Θεόδωρος → Федор)、中世ギリシャ語も東スラヴ語も母音の長短の区別を失っていたという事情を考慮すると Γεώργιος の εω も εο とおなじ扱いを受けた可能性がある。そして、ГЮ, ГЕ, ГИ の子音の音価は14世紀には /j/ の実現音と同じになってしまい、そのことが表記にも反映されたということであろう。

「Г+前母音字」が次第に /j/ の実現音に順化したことは、Гюрги と Юрьи との折衷形式である Юрги の存在によっても裏付けられる。Roman Jakobson は Jakobson (1971)の中で ДЪЖГЪ の Г が j を表していたという推定に対して、次の

ような疑念を呈している。「中世ロシアの文字体系で j を Г で表していた可能性は理論的には排除することができないのであるが、やはりこの仮説にも数々の反論が予想される。すなわち、もしこの場合 Г が j を表していたのであれば、13-14 世紀の古文献に Г と Ъ をところどころで取り違えるという誤りがあってもおかしくない」(248)。本来の東スラヴ語の語彙に含まれる /j/ を文字 Г を使って書きあらわす習慣はもろくなかったのだが、ДЪЖГЬ のようにもともと東スラヴ語になかった音声を表記するための工夫として Г が使われることはあり得るのだろう(例えば、「1 月」を意味する генварь, генуарь のように)。確かに ДЪЖГ- の格変化形や派生形において Г の代わりに Ъ が書かれた例はおそらく見つからない。しかし、Юрг- はまさに Гюрги が Юрьи に移行する過程で生み出された過渡的な形式であると見做すことができると思われる。この表記は『ノヴゴロド第一年代記・古輯』には現れないのだが、14 世紀以降に書かれた『ラヴレンチー年代記』、『ノヴゴロド第一年代記・新輯』、『イパーチー年代記』には使用例が認められ、特に最後の二つの年代記には頻出する。一方、『白樺文書』においても юрги, юргю, юрегу, юргию といった表記は 14 世紀後半の層から出土した文書に特有のものである。したがって、音価の認識という点では 14 世紀を境として「Г+前母音字」と /j/ の実現音は同一視されるようになったが、表記のバリエーションとして過渡的な Юрг- が 14 世紀には書き手の選択に委ねられた。そして、15 世紀になるとこの過渡的な形式は役目を終えて Юрь- が唯一の表記となったということであろう³。

4. おわりに

結局、外来語の表記というのは、一種の翻訳行為であるということができる。つまり、音声の翻訳が行われているのである。例えば、ある言語の固有名詞が他の言語に受け入れられる時、もしその固有名詞の中に受け入れ側の言語の音声目録に存在しない音声が含まれていたとすると、その音声は受け入れ側の言語に固有の音声に置き換えられるか、あるいは近似的な音声によって再現されることになる。そして、外来の音声が最終的に受け入れ側の言語の既存の音声に収斂するのか、あるいは異質な特徴を保ち続けるのかは、その音声およびその音声を含む語彙に対して受け入れ側の言語を使用する人々がどのような価値観を抱いているのかによって決まるのだと思われる。

³ 15 世紀に成立したと言われている『イパーチー年代記』には Юрг- が 6 例しか現れない。以下に示す他の例の頻度と比較せよ。Георг- 28 例、Гюрг- 249 例、Дюрг- 123 例、Дюрд- 17 例、Юрь- 89 例。

参考文献

- РФ (2013): Русская фонетика в развитии. Фонетические «отцы» и «дети» начала XI века. Москва. 2013.
- Зализняк (2004): А. А. Зализняк, Древненовгородский диалект. 2-е изд., переработанное с учетом материала находок 1995–2003 гг. Москва. 2004.
- Ляпунов (1935): Б. М. Ляпунов, О некоторых примерах образования имен нарицательного значения из первоначальных имен собственных личных в славянских языках. // Академия наук СССР Н.Я. Марру. Ленинград. 1935. С. 247–261.
- Успенский (1994): Б. А. Успенский, Краткий очерк истории русского литературного языка. Москва. 1994.
- Browning (1983): Robert Browning, *Medieval & Modern Greek*. 2nd ed. Cambridge. 1983.
- Geldart (1870): E. M. Geldart, *The Modern Greek Language in Its Relation to Ancient Greek*. Oxford. 1870. (Reprint)
- Jakobson (1971): Roman Jakobson, “Спорный вопрос древнерусского правописания (ДЪЖГЪ, ДЪЖЧЪ)”. *Selected Writings*. Vol. 1. The Hague. 1971.
- Unbegaun (1938): Boris O. Unbegaun, “Le nom de *Georges* en russe”. *Annuaire de l’institut de philologie et d’histoire orientales* (Université Libre de Bruxelles) 6. 1938. pp. 323–329.
- 岡本 (2008) : 岡本崇男「人名 ГЮРГИ の表記をめぐって」『神戸外大論叢』第 59 巻第 2 号、pp. 73–94。

Keywords : 中世ロシア語 中世ロシア年代記 言語規範